

道徳と家庭科の家族の授業

—「いろいろな家族」の事例研究から—

伊深祥子*

高橋千春**

堀江里紗***

1. はじめに

堀江は、教育実習で東日本大震災を取り上げた道徳の授業を実施した。堀江自身が被災地へのボランティアで、自分の見たこと、感じたことを、これから生きる子どもたちに伝えたいという思いで実施した道徳の授業である。道徳の授業の目的は、何気ない毎日が当たり前ではないことに気づき、感謝の気持ちを持つことができるようになることであった。この道徳の授業の生徒の感想には、「ご飯が食べられる」「気持ちよく寝られる」「ガスが使える」「家族や友だちがいる」「家族に毎日会える」「家族としゃべれる」など衣食住と家族に関する家庭科の内容が記述されていた。道徳と家庭科は、生活にかかわる内容が多い点で共通していることを改めて感じた授業であった。中間・多々納(2010)は、家庭科の「自分の成長」「家庭生活と仕事」「家族や近隣の人々とのかかわり」「環境に配慮した生活の工夫」は道徳とかかわっていると述べている。鶴田・伊藤(2008)は、「家族」の授業は、他の領域のように身につける「知識」や「技能」が明確ではなく、「関心・意欲・態度」といった測定しにくい情意的な側面での学びが中心となってしまうため、指導が難しくやりづらいと述べている。情意的な側面の学びが中心になるとされる家庭科における家族の授業と道徳とのかかわりを考察することが本研究の目的である。

2. 研究方法と研究対象

学習指導要領と教科書から、家庭科と道徳の家族の記述を分析する。つぎに、これまでの家庭科における家族の授業を分析し、家族の授業の方向性を探る。最後に、授業の方向性に沿って、「いろいろな家族」の複数回の模擬授業(2013年6月~11月)を実施する。模擬授業後のカンファレンス、授業者と観察者のナラティブで事例研究することで、道徳と家庭科における家族の授業の違いを探る。

3.1 中学校学習指導要領「道徳の家族と家庭科の家族」

道徳の時間は昭和33年に設けられて以降、常に家族についての内容が扱われている。道徳の学習指導要領6回の家族の扱いの変化と、平成20年の家庭科学習指導要領の「家族・家庭と子どもの成長」の家族の部分の比較を表1に示す。

道徳では尊敬、敬愛など情緒を養うことが目的とされている。また望ましい家族のあり方として、「健全な家族」「明るい家族」「充実した家族」が示されている。平成元年からは尊敬、敬愛する対象として具体的に父母、祖父母が明記されるようになった。昭和44年のみで地域の一員とし

*愛知教育大学

**元岡崎市立大門小学校

***名古屋市立表山小学校

ての自覚があげられている。一方家庭科では、「自分の成長と家族、家庭とのかかわり」を考えると、「家庭や家族の基本的な機能を学ぶことから家族関係を考えること」が目的とされ、愛情や思いやり、敬愛の念をいだくなどの情緒を養うことは目標とされていない。また、望まし家族のあり方についての記述もない。このように家族を学ぶ道徳と家庭科の目的は違うものである。

表1 中学校学習指導要領「道徳の家族と家庭科の家族」

道徳	告示	家族の内容	情緒			望ましい家族			家族の構成メンバー			地域	家族をつくる	対象	特徴	
			愛情	思いやり	尊敬(敬愛)	健全	明るい	充実	自覚(自己)	共同	家族の一員	地域	家庭(家庭)を築く	父母、祖父母		
道徳	昭和33年	1958年	家族相互の愛情と思いやりと尊敬とによって健全な家族を築いていこう。	○	○	○	○						○		愛情・思いやり・尊敬・健全	
	昭和44年	1969年	家族の一員としての自己の立場を理解し、愛情と思いやりの気持ちのうえに明るい家庭を築いていくこと。	○	○			○		○			○		自覚・家族の一員	
	昭和52年	1977年	家庭や地域の一員としての自覚をもち、協力し合って共同生活の充実を図る。							○	○	○			共同・地域の一員	
	平成元年	1989年	父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くようにする。			○			○	○	○		○	○	敬愛・充実・自覚・祖父母	
	平成10年	1998年	父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。			○			○	○	○		○	○		
	平成20年	2008年	父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。			○			○	○	○		○	○		
家庭科 「家族・家庭と子どもの成長」	平成20年	2008年	(1) ア 自分の成長と家族と家庭生活のかかわりについて考えること。								○				自分の成長・家庭や家族の基本的な機能・家族関係	
			(2) ア 家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域のかかわりについて理解すること。									○				
			(2) イ これからの自分と家族とのかかわりに関心を持ち、家族関係をよりよくする方法を考えること。							○		○		○		

3.2 道徳における家族の授業事例

ここでは、道徳における家族の授業例を示す。資料を読み取り、登場人物の気持ちを考えると道徳の授業方法がとられているが、授業の展開例には、「母が家事をするのは当然」「家族の一員」「家族のだれにも役割がある」などの記述があり、家庭科の家族の授業内容と重なりがみられる。道徳の家族の授業では、家族相互の思いやりの必要性を学ぶことが目的とされている。

【ねらい】 家族の中で自分の役割を自覚し、お互いに助け合い、明るい家庭を築いていこうとする気持ちを助ける。

【展開】

導入：自分と家族のかかわりを想起させる発問

「親にしかられるのはどんなときが多いですか」

展開：資料 「母の反撃」を読み、登場人物の考えや気持ちを読み取る。

活動 家族の一員としての役割を果たすことの大切さについて話し合う。

週末：説話 家族相互の思いやりが必要

(「明るい人生2年」, (2012), 「母の反撃」指導書より)

3.3 家庭科の教科書における家族

平成20年(2008年)の学習指導要領では、「家族・家庭と子どもの成長」と領域名が変更され、これまでB領域であった家族の内容はA領域として重視されるようになった。T社、K社の過去3回分の教科書、および平成23年から新しく参入したY社の家庭科の教科書の記述を分析する。K社の教科書は、A分野となった「家族・家庭と子どもの生活」は、平成23年度から学習指導要領に沿って教科書のはじめのページに移動された。Y社もK社と同様に「家族・家庭と子どもの生活」はA分野として教科書の初めのページに掲載している。しかし、T社は平成23年も「家族・家庭と子どもの生活」は教科書の後半に位置づけている。T社は、A分野となった「家族・家庭と子どもの生活」を後半に位置づけた理由を、「教科書作成の際に、現場の教員にどのようなカリキュラムを組んでいるか、どんな教材を使っているかをアンケートした結果、第1学年では、衣食住の身近で取り組みやすい内容を扱っている結果が得られたこと、および家族に対してマイナスイメージを持っている子どもがいる中で、これからの生徒と関係をつくっていく第1学年の最初の授業としてふさわしくない、あえて家族の内容を選ばないという声があるなど、家族の授業の扱いにくさがうかがえたことによる」と説明している。

表2に家族の内容の教科書のページ数の変化を示す。本論では、「家族・家庭と子どもの生活」の「家庭と子どもの生活」の内容を除いた部分を「家族」として比較する。T社、K社、Y社とも「家庭と子どもの生活の内容」を除いた「家族」の内容の記述は10ページ前後と、全体のページ数からみて少なく、平成23年に特に増えていることはない。記述が最も多いのはY社で14ページの記述がある。3社とも「幼児のふれあい体験」の必修化に対応して、幼児に関する記述は多いが、「家族」の記述は少ない。

表2 家庭科の教科書における家族の内容のページ数の変化

	平成13年		平成17年		平成23年	
	全体	家族の内容	全体	家族の内容	全体	家族の内容
T社	215	9	235	9	251	10
K社	223	10	231	12	259	9
Y社	275	14

(「家庭と子どもの生活」は除く)

3.4 家庭科の教科書の家族に関する道徳的記述

家庭科の教科書の家族に関する道徳的な記述を表3に示す。平成23年の3社の比較をみると、Y社の記述に道徳的な記述が多く見られる。T社では「よりよくしていこう」「協力し合う」「気持ちのよい楽しい場所」の記述が見られ、K社は「ともに過ごす時間を楽しむ」「協力して生活する」の記述が見られる。

表3 平成23年の家庭科の教科書の家族に関する道徳的な記述

T社	K社	Y社
家族で協力し合うことで、家庭は気持ちのよい楽しい場所になります。P.164	家族のやすらぐ関係は、ともに過ごす時間を楽しんだり、家事を分担したり、それぞれの立場や考え方を尊重しながら、協力して生活することでつくることができます。P.23	家族みんなが協力することで、仕事は早く終わり、家族団らんの時間もとりやすくなります。P. 13
		家族のそれぞれが、お互いの立場や役割を理解して協力することが、よりよい家族関係を保つことにつながります。P. 15
		家族内で意見の対立や気持ちのすれちがいが起きたときは、相手の立場や役割にそって考えてみるのが大切です。P. 15

T社とK社の平成23年の教科書の道徳的な記述は少なくなっているが、平成13年、平成17年の教科書には道徳的な記述が多く見られた。これまでの家庭科の教科書の家族についての道徳的な記述には次のようなものがあった。

【平成13年・平成17年の道徳的な記述（下線部）の例】

- ・「家族がつながりを強めるためには、おたがいにそれぞれの立場を理解し、相手の気持ちを尊重することが大切です。」（T社・H13p174）
- ・「家庭のはたらきがうまく営まれるように、家族のメンバーはそれぞれ協力しあうことが大切です。」（T社・H13p176）
- ・「これまで成長してきた中で、「ありがとう」の気持ちを伝えたい人をあげましょう。」（T社・H17p170）
- ・「家族とうまくコミュニケーションをとるためには、相手の立場を思いやり、まず、相手の気持ちを理解することが大切です。」（T社・H17p176）
- ・「家族で話し合ったり助け合ったり・・・家族以外の人に助けってもらうことも必要です。」（K社・H13p167）
- ・それぞれの立場や考えを尊重しながら、家族の関係が作られていきます。」（K社・H17p177）

平成 23 年の教科書では、道徳的な記述は少なくなっているが、題材として示されているロールプレイングの内容や会話を考える例などに、道徳的な内容が含まれる可能性がある。指導者がどのような家族観をもって授業を展開するかによって、ロールプレイングや会話を考える授業の展開が情意的な側面の学びになることが考えられる。情意的な側面の学びは、「家族への思いやりをもって過ごそう」や「家族仲よく暮らしましょう」といった「心のあり方」に目を向けた授業になる。鶴田（2004）は、家庭科で家族について学ぶということは、自分たちの家族関係を客観的にみつめ、問題があれば何が問題なのかを見極め、解決するにはどうしたらよいかを、自分たち自身が考えることであると述べ、家庭科の家族の授業は情意的な側面を学ぶことではないことを示している。

3.5 家庭科の家族の授業分析

家庭科における家族の実践例を表 4 に示した。3 例の授業実践の分析から家族の授業の方向性を探る。

実践例 1 では、温かい家庭生活を営むには、愛情あふれる家族関係を保つことが学習目標に挙げられている。理想の家族像を示して授業が展開されている実践である。広田（2002）は、理想の家族は現実にはどこにも存在しない標準化された「型」のようなものであり、この「型」が各自の固有の履歴や事情をもつ生を批判・否定して規範を押しつける機能をもつと述べている。また、家族内の人間関係は、一人ひとりの心がけ次第で改善できる部分が多いため、なんらかの好ましい家族のイメージに向かって各メンバーが努力することは無駄ではないが、理想の家族が強調されればされるほど、現実の家族のあり方の「不十分さ」がクローズアップされ、不平や不満が募っていくという側面も見落としてはならないのではないかと述べている。教師が固定化した理想の家族を示すことは適切ではない。授業で学んだことを実践できない家庭環境に置かれている子どもたちがいる可能性があるからである。また、この授業では、家族のマナーは思いやり、協力、礼儀などであるとしている。家族間での思いやり、協力、礼儀は必要であるが、家庭科の家族の学習目標として教師が伝えるものではない。授業の中で子どもたちが選び取った解決策として「道徳性」が学ばれる可能性はあるが、情意的な側面は、家庭科の授業の目標ではない。

実践例 2 は、資料を読んで感想記述をし、意見交流する道徳の授業方法をとっているが、「努力」「工夫」「協力」「感謝」などの情意的な学びは目的とされていない実践である。授業のねらいは「食事と家族のかかわりについて考える」「家族がいっしょに食べる意味について考えることができる」とされ、長時間労働、遠距離通勤、単身赴任、別居、塾、部活などの社会条件に気づき、家族の努力だけでは解決できないことがあることが学ばれている。理想の家族の食事が示されているのではなく、現代社会の問題を見つめ、家族について子どもがさまざまな視点から考えることができる授業である。

実践例 3 の目標は、「家族の生活を見直し、家族に感謝し、家族が喜んでくれることを意識してプレゼント製作することができる」とされている。この授業は、感謝することを前提に授業が展

開されている。「家族の生活に役立つ物をつくろう」と単元を設定し、子ども自身が「家族に感謝の気持ちをこめてつくろう」と思うことはあるかもしれない。しかし、この授業では製作する前段階で、教師が子どもの思いを限定して情意的な側面を家庭科の授業の目標としている。感謝や思いやりは大切なことであるが、制作をとおして、子どもたちが自然に感謝や思いやりをもつことはあっても、情意的な側面は家庭科の授業の目標ではない。

表4 家庭科における家族の授業実践分析

	授業実践1	授業実践2	授業実践3
授業名	「家族の日常のマナー」	「家族にとって食事とは」	「生活をつみ、お世話になった人にプレゼントしよう」 「心のこもったプレゼントを布でつくろう」 ～家族の喜ぶ顔をめざして～
領域	中学校 「家庭生活」	中学校3年食物学習のまとめ (内容は家族分野であるとしている)	小学校 6年
出典	生き生きと学習できる指導計画 その理論と実践	男女が学ぶ家庭科の授業	http://www.city.cure.lg.jp/~gakukyo/pdf/16-shyouka/6nen1.pdf
年度	1991	1995	
時間	3時間扱い	2時間扱い	12時間扱い
授業観	楽しく、温かい家庭生活を営むには、愛情あふれる家族関係を保つことが大切であるとし、そのためには家族一人ひとりがお互いに協力し合おうと努力しなければならない。	孤食・拒食・過食などの子どもの食異常が目立ってきており、家族揃って夕食を食べることが難しい中学生にとって、家族と共に食べる食事の意味を改めて考える。	今までの自分と家族のかかわり合いをとおして生まれてきた感謝の気持ちを、自分にできるプレゼントの形に表そうという学習。
目的	家族の日常のマナーの重要性を知る。 家族愛を持ち、よりよい家庭生活を営もうとする意欲を持つ。	食事と家族のかかわりについて考えることができる。 家族がいっしょに食べる意味について考えることができる。	家族の生活を見直し、家族に感謝し、家族が喜んでくれることを意識してプレゼントを制作することができる。 *製作に関する目標
導入	家族愛のある理想の姿を感じるためにVTRを視聴	資料「太郎君の孤食」を読んで、太郎・父親・母親について感想を書く。	どんな物を作ったら喜んでもらえるか考えよう。
展開	食事のマナーはどんな目的をもっているか。 事前の調査結果を見る。 家庭内のトラブルを創作劇で演じる。 トラブルの原因を考えて発表 日常のマナーの重要性を知る。	意見交流 3人がなぜそうなったか理由を考える。 3人は夕食の場面でどうすればよかったかを考える。 わが家の夕食のようすを書く。	手づくりのプレゼントを課題別のグループに分かれて製作する。 心をこめて手づくりとプレゼントを作ろう。 作品展示会 プレゼントの渡し方を工夫しよう。 ラッピング・メッセージカード
まとめ	VTRを再視聴し、創作劇と比較する。 「親しき仲にも礼儀あり」の意味を考え、自分が具体的に出来るマナーを挙げる。	食事は家族にとってどのような意味をもつかを考える。 家族がいっしょに食事ができないときはどのようなときか。	プレゼントを渡した時の様子の紹介。 感謝の伝え方。
教材	自作のVTR	資料「太郎の孤食」	エプロン・ランチョンマット・鍋つかみ・枕カバー
授業方法	マナーの欠如によって起きるトラブルを創作劇で演じる。	感想記述 意見交流	製作の計画 製作実習

3.6 家庭科における家族の授業の方向性

これまで述べてきた学習指導要領で示されている道徳と家庭科における家族の内容の比較、家庭科の教科書の家族に関する記述、および家庭科の家族の授業分析から、家族の授業の方向性を3点述べる。

1つめは、家族の授業では、思いやり、協力、感謝などの心のあり方を学ぶ「情意的な側面を目標としない」ことである。家族への感謝や協力は学んで身につくことではない。授業の中で子どもたちが自然にそういう気持ちになることはあるかもしれないが、思いやり、協力、感謝することを身につけることは家庭科の目標ではない。

2つめは、自分の家族にとどまらず、「視野を広げて家族をとらえる」ことである。そのために、家庭科では、現代社会における家族、家族が抱える問題を取り上げる。斎藤・鶴田（2010）は、自分の家族しか知らない子どもたちが、異なる家族や家庭のスタイルを学ぶことができるのも家庭科の学習ならではの述べている。次の時代を担う子どもたちの視野を広げるために、客観的に家族をとらえる機会をつくる。

3つめは、「望ましい家族を押しつけない」ことである。牧野（2006）は、「望ましい家族」という考えには、正常な家族、望ましくない親などを教師や国家が決めてしまい、家族の多様なあり方を認めなくなる危険性をもってしていると指摘している。さらに、むしろ望ましい家族や、望ましい親などについて子どもが考えがちな固定観念を改めて問い直させるような学習こそが必要であり、大切なのは何が望ましく、何がよい家族であるか、学ぶ子ども一人一人が状況に応じて決めることができるようになることであろうと述べている。子どもたちの家庭環境はさまざまであり、望ましい家族像を示すことは、望ましい家族にあてはまらない子どもを傷つける可能性がある。現代の子どもたちはメディアの普及により固定化された家族のイメージをもっていることが多いが、その固定化された家族像を壊し、自分と周りの家族のあり方を認めるような授業づくりをめざす。

4.1 授業「いろいろな家族」の事例研究

家族の授業の3つの方向性をみだしている実践に、イラストを教材とした「いろいろな家族」の授業がある。「いろいろな家族」の授業は、石橋（1990）が最初であろう。石橋の実践の後も1991年の穴見玲子、1994年の原田優子、1996年の伊深祥子などの実践が積み重ねられている。

石橋は、「いろいろな家族・いろいろな暮らし方」の15のイラストの中から13のイラスト（丸木百合子編集協力、（1984）. こころとからだの知りたいこと辞典. 「男の子と女の子の本」. 5. ポプラ社. イラスト：おかべりか）を選んで使用し、何も説明をしないで、イラストを見せ、感じたことを記述させることから授業をはじめている。つぎに石橋は子どもたちが「信じられない家族」として3つの家族を中心に授業を展開した。石橋の授業の目的は、「普通の家族」「正しい家族」の概念を壊し、一人一人の生き方によってどんな形にもなることや、一生のうちで家族が変化することを知ることである。

鈴木・伊深（1996）は、石橋と同じイラストを使用して授業を展開している。イラストを6つに絞って、それぞれ家族だと思う理由・思わない理由を記述させ、さらにその理由についてどう思うかを議論した。イラストを絞った理由は、それぞれについて議論を深めるためである。鈴木・伊深の授業の目的は、生徒の中にある固定化された家族像を浮き立たせて、家族とは何かを考えさせることである。

4.2 高橋の教育実習での授業 2012年6月 O 付属中学校

高橋は、伊深（1996）の実践をもとに教育実習でイラストを使用した「いろいろな家族」の授業を実施した。

【使用したイラスト6（おかべりか）とイラストの説明書き】

- A 仲良しの男の人や女の人同士で住む
- B 子どもがいなので、養子をむかえる
- C おじいちゃんとおばあちゃんとねこ
- D 子どもを連れて親同士が再婚
- E ひとりで生活している人
- F 離婚したお母さんと子どもたち

黒板に生徒の配布したものと同一イラストを掲示して「このイラストを見て、どれが家族だと思いますか」と問いかけることから授業をはじめた。子どもたちの議論が一段落したところで、「家族を成立させる条件はなんでしょうか」と問いかける授業の流れである。大きな発問は2つだけにして、子どもたちに話し合いを任せた授業である。どんな話し合いになるかわからなかったが、子どもたちが家族について考え、考えたからこそ難しいと迷っている姿が見られた。普段あまり意識することがない「家族」とはなにか、迷ったりわからなくなったりすることがこの授業の良さではないかと感じた授業となった。

この授業の課題は、イラストの選択と説明書きの内容を検討することである。生徒たちは、Aのイラストについて同性愛の同居か、ただの友達同士の同居かで意見が分かれた。同性同士のカップルを家族と認めることができるかどうかを考えさせるためには、説明書きを修正することが必要である。Eのイラストでは、一人暮らしなのか、家族はどこかにいるのかなどの情報がなく、Eのイラストから何を考えさせたいのか、Eのイラストを扱うべきかどうかを再考することが必要である。

4.3 模擬授業①（高橋の模擬授業） 2012年11月14日

教育実習での授業を改善するために、学生4名で実施した高橋の教育実習の授業を模擬授業した。授業後のカンファレンスでの課題と修正点はつぎの3点である。

- 1) 最初の発問「どれが家族だと思いますか」は、どれが家族ではないと思うかも問うてしまっていることになる。家族だと思うことに重点を置いて授業をすすめる。
- 2) 2つ目の発問「家族を成立させる条件はなんでしょうか」は、条件という言葉が生徒にと

って分かりづらい。「家族である要素にはなにがあるでしょうか」に変更する。

- 3) 家族だと思うかどうか、授業者が黒板で移動させたように、生徒の立場でもイラストを動かしたい。ワークシートに最初の考えと授業後の考えを図として記入できるようにする。

4.4 模擬授業② (堀江の模擬授業) 2012年11月21日

高橋の模擬授業を修正した指導案で、堀江が学生4名に模擬授業を実施した。堀江の模擬授業では、イラストや発問の言葉など授業の方法は、修正されたが、授業者がどう授業を展開するかが問われることになった。

授業者堀江は、自分はあまり話さずに生徒たちに話し合いを委ねなければ、深まりのある授業にはならないと思って授業に臨んだ。しかし、実際には授業者が仕切ってしまったため、生徒どうしの話し合いが充分におこなわれない授業展開となってしまった。堀江は、「さまざまな家族のあり方がある」というところにゴールを持っていくつもりだったが、そのゴールすらもなんだかあいまいで、家族の授業は扱いにくいということを、身をもって体験することになった。堀江の模擬授業からの改善点は以下の3点である。

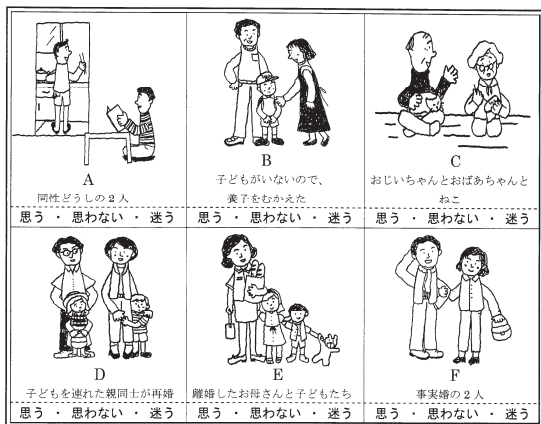
- 1) はじめの発問に時間がかかりすぎるので、イラストに対して「思う・迷う・思わない」に○を付ける形とする。
- 2) 授業者が話し過ぎないように、全体討議の前にグループでの意見交換の場を設定する。
- 3) Eの「ひとりで生活する人」のイラストを削除したため、「家族だと思わない」に分類されるイラストが減ってしまって話し合いが深まらない。揺さぶりをかける別のイラストとして事実婚のカップルを加える。

4.5 模擬授業③ 永曾の模擬授業での出来事 2012年11月28日

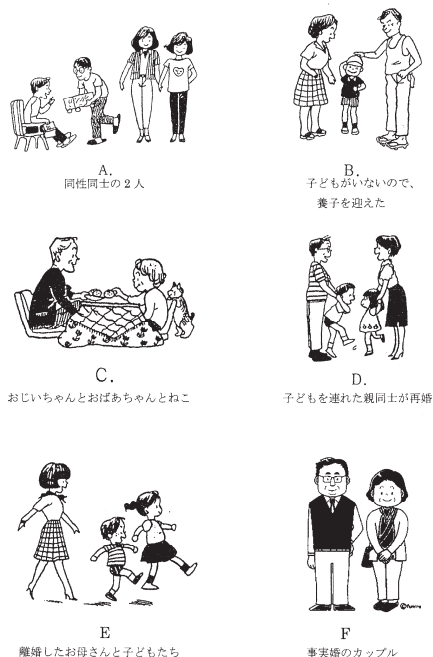
修正を重ねた授業を教職実践演習で学生16名を対象に永曾が実施した。使用したワークシート(資料1)と、黒板に掲示したイラスト(資料2)はイラストから受けるイメージに左右されないように別のイラストを使用した。授業者永曾は、家族と思うかどうかのグループでの話し合いが白熱していて、机間指導をしても楽しかったし、生徒役も楽しそうだったと述べている。全体の議論の後で、授業のはじめと、授業後ではワークシートの図がほとんどの生徒役で変化していた。授業を終えて参加者が感じたこの授業の目的は、「家族について関心を持ち、家族とは何か深く考える」「いろいろな家族のあり方を知り、家族を成立させる要素を理解する」であった。

＜家族について考えよう＞

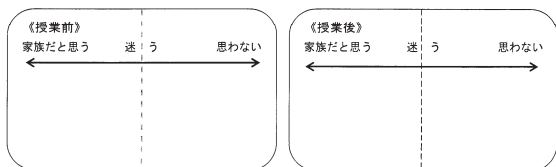
番号() 名前()



○黒板に貼る6枚のイラスト



◎図にして考えてみよう



資料①：配布ワークシート

資料②：掲示したイラスト

5. 家族の授業の意味を考えさせられた出来事

模擬授業のカンファレンスでは、家族の授業の難しさを考えさせられる出来事が起きた。授業を計画し、カンファレンスで司会を務めた高橋のナラティブを以下に示す。

・・・今回のような和やかな授業の雰囲気も重要だと感じた。このような雰囲気の中で家族の授業が出来たことに永曾に授業を任せて本当に良かったと思った。ただひとつだけ気になっていることがあった。Aさんが一度も挙手していなかったことである。授業の参加者の中で、一度も挙手がなかったのはAさんだけであった。もしかして挙手が出来ない中学生の役を買って出ているのかもしれないと思ったが、少し気にかかった。

カンファレンスが始まり、この授業の目的と、これまでの修正の経緯を報告した。授業に対する意見をもらい話し合いを深めていく中で、頭の片隅では模擬授業の中でAさんが挙手しなかった理由を聞こうかどうか迷っていた。もしかしたら、他人に聞かれたくない理由があるのかもしれない・・・と考えながら、時間が経ってしまっていた。指導教官が「そろそろ時間なので終わりにしていいですか。」と言うとBさんが授業に対する意見を言ってくれた。そのあと、私は、「最後にひとつだけいいですか。」と切り出し、授業でAさんだけが一度も挙手がなかったこと、

その理由を聞いてみたいと伝えた。指導教官は「そうだったの、私もきいてみたい。もし、言えるなら聞かせて。」とAさんに寄り添って、Aさんの反応を待ってくれた。Aさんは立ち上がり、下を向いたまま、少しずつ言葉を選んで、彼女の家庭のことを話し始めた。目には涙が溜まっていた。彼女にとってこの授業は辛いものであったのだ。私はみんなの前で理由を聞いてしまい申し訳なかったと後悔した。それと同時に、やはり家族の授業をするときは、一人ひとりのプライバシーへの配慮が必要だと強く感じた。Aさんの元いき、さっきはみんなの前で意見を求めて申し訳なかった、でも気持ちが聞けて良かったと伝えた。Aさんは、「大丈夫だよ、ごめんね」と答えてくれたが、私は気持ちが晴れなかった。授業のあと、指導教官は気にしなくていいといってくれたが、私はAさんに対して申し訳ない気持ちでいっぱいであった。

後日、指導教官に「見せたいものがある」といって一枚の紙を渡された。Aさんが書いたものだった。教職実践演習の感想である。「いろいろな家族の授業で、一度も発表できなかったことに気づいてくれていたのに驚いた。家族の授業はずっときらいだったけど、少し自分の家族について受け入れるきっかけとなったような気がする。」と書かれていた。私は驚いた。そして、嬉しかった。まさかAさんがそんな風に思ってくれているなんて考えもしていなかった。私はあのカンファレンスで、Aさんを傷つけてしまったとばかり思っていた。家族の授業をしたことが良かったのか、また家族の授業でAさんが一度も挙手しなかったことに気づいたことが良かったのかはわからない。けれど、指導教官が「これこそが家族の授業をやる理由だよな。」と言い、私もそうだ、と思った。家族の授業は、誰かを傷つけてしまうかもしれないけれど、誰かを変えるきっかけにもなる。だからこそ、家族の授業をやり続けなければならないと感じた。

6. おわりに

本研究では、道徳と家庭科の家族の授業を分析し、イラストを使った「いろいろな家族」の授業を事例研究した。学習指導要領では「家族・家庭と子どもの生活」は重視されているが、教科書の「家族・家庭と子どもの生活」記述が幼児の学びに偏っており、「家族」の授業の記述は少なかった。教科書分析、授業分析から、家族の授業の方向性として、「情意的な側面を目標としない」「望ましい家族像を押しつけない」「視野を広げて家族をとらえる」の3つを示した。3つの方向性にそった「いろいろな家族」の模擬授業の出来事では、家族の授業は、誰かを傷つける危険性もあるが、誰かを変えるきっかけになることがあきらかになった。家庭科の家族の授業は、道徳の家族の授業のように情緒を養うことが目的でもなければ、望ましい家族像を示すことでもない。自分の家族を客観的にみつめ、新たな視点でとらえ、自分の家族観を問い直すことが家庭科の家族の授業の目的である。

参考文献

- 愛知県小中学校校長会. (2012). 『道徳 明るい人生2年 指導書』. 図書印刷.
斎藤弘子・鶴田敦子. (2010). 『生活を見つめる 家族・家庭生活』. 日本標準.

- 鈴木敏子・伊深祥子. (1996). 中学校技術・家庭科における「家族」に関する教材づくりと授業実践の課題—中学1年生の「家族観」調査から. 横浜国立大学教育学部教育実践センター紀要. 12
- 鶴田敦子. (2004). 『家庭科が狙われている 検定不合格の裏に』. 朝日新聞社.
- 鶴田敦子・伊藤葉子. (2008). 『授業力 UP 家庭科の授業』. 日本標準.
- 仲間美砂子・多々納道子. (2010). 『小学校 家庭科の指導』. 建帛社.
- 広田照幸. (2002). 『〈きょういく〉のエポケー第1巻〈理想の家族〉はどこにあるのか?』. 教育開発研究所.
- 牧野カツコ (2006). 『青少年期の家族と教育—家庭科教育からの展望—』. 家政教育社.
- 文部科学省 (2008). 『中学校学習指導要領 技術・家庭編』. 教育図書.